第3種郵便物認可

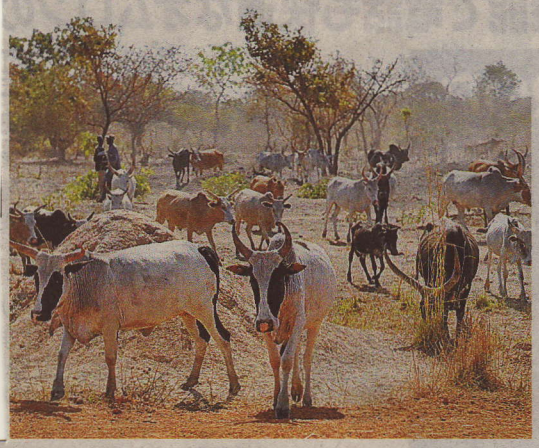
復興へ 難民帰郷

スーダン南部 内戦逃れた子どもたち

育て次世代 学舎建設

ロストボーイズ（迷子たち）と呼ばれた人々が、スーダン南部で活躍している。南北内戦で親とはぐれ、米国などに難民として引き取られたが、独立に一役買おうと相次いで故郷に帰還しているのだ。しかし、内戦の影響は今も色濃く、教育は貧弱で人材不足も深刻だ。

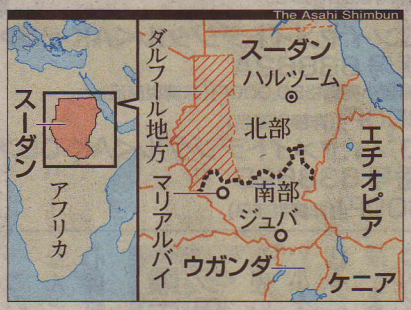
（マリアルバイ〈スーダン南部〉＝古谷祐伸、ジュバ〈同〉＝貫洞欣寛）



スーダン南部のマリアルバイは、家畜の牛はたくさんいるが、電気や水道、舗装道路はない村だ。人口は約1万6千人。2005年まで約20年続いた南北内戦では、北部のアラブ民兵や軍に何度も襲われた。

この村に「卒業生との結婚には、牛200頭を払う価値が出る」と言われる私立マリアルバイ高校がある。

できたのは09年5月。8年制の小学校の卒業生が、4年間学ぶ。授業料は無償で男女250人の生徒は南部各地から選抜された。校舎のほか食堂、寮など12の建物がある。実験室には試験管や顕微鏡、化学物質などが棚に並ぶ。



家庭の事情などで23歳で10年生のピーター・コヨムさんは近くの村出身。小学校を08年に卒業した翌年、入学した。「将来は科学者になりたい」と語る。

学校を建て、運営するのは、村で生まれたバレンチノ・デンさん(32)だ。資材や教材はウガンダやケニアから輸入、8人雇った教師も大半は外国人だ。

デンさんが8歳だった87年7月、馬に乗ったアラブ民兵に村が襲われた。一緒にいた母とはぐれ、民兵が次々と村民を殺すのを目撃。怖くて1人、村の外へ逃げだした。

やがて、同じ境遇の子に次々出会い、一緒に旅する。だが道中、野生動物に襲われたり、飢えたりして仲間が次々死んでいった。

約800キロに及ぶ放浪の末、5カ月後にエチオピアの難民キャンプにたどり着いた。そこには多くの、ひとりぼっちになった子供たちがいた。彼らは3万人にのぼり、国際社会からは女子も含め「ロストボーイズ」と呼ばれた。

親と別れたデンさんにとって、楽しみは学校だった。キャンプ内の木の下で、地面を黒板代わりにした学校で学び始め、その後、移ったケニアの難民キャンプで高校を卒業した。そのお陰で00年、キャンプで活動する日本のNGOに雇われた。

職員の高村憲明さんとの出会いが、今の活動の原点だという。「前向きで陽気なノリアキから、自分の可能性を信じる大切さを教わった」。高村さんは01年7月、ケニアでの仕事中に交通事故で亡くなる。デンさんは直後、米国に難民として渡り、勉強を続けた。

内戦が沈静化した03年12月、16年ぶりの里帰りで両親や親類と再会。内戦で変わり果てた村の様子に、何かしようと心が動いた。デンさんをモデルにした小説「What Is the What」を米国人が出版。100万部が売れ、デンさんが手にした収益をマリアルバイ高校のために投じた。

「南部自治政府は、小学校作りにすら苦労している。南部全体に高校は10もない。悲惨さから身を守るには、高い教育を受け、世界とつながること。内戦を生き延びた僕らは、将来に責任がある」。デンさんはそう話す。